

主義」へと邁進していくのかということが理解できる。その背後にあるのは、この世界に絶対的な真理が存在するということへの強力な確信、そして人間はそれを掌握できるということへの揺るがぬ信念なのである。そのように考えれば、いまなお西洋世界において散見される、絶対的な「正義」への確信や、そうした「正義」に基づく躊躇のない暴力の行使、あるいは「進歩という概念などイデオロギーに過ぎない」、「人間が存在することに特別な意味や目的などない」と聞いて、彼らが見せる意外なほどの動揺など、一連の事態がなぜ生じるのかということが分かる。それは、おそらく「世界観＝人間観」の基底において、彼らがいまでも同じ物語を共有しているからなのである⁽¹⁷⁾。

いずれにせよ、ルネッサンス期のキリスト教がもたらした「伝統」は、われわれが想像する以上に西洋世界の「世界観＝人間観」に深く根をおろしている。そしてそこには〈無限の生〉へと続いていく、いくつかの重要な着想が確かに含まれていたのである。しかしその「世界観＝人間観」が完成に至るためには、そこに新たな契機が必要であった。われわれが見てきたように、「完全な人間」の物語は、後にあらゆる「存在論的抑圧」から解放されていく個人の物語として再編されなければならない。そしてその潜在力が本当の意味において開花するためには、〈社会的装置〉に紐づけされた諸々の科学技術によって、われわれの根源的な「意のままにならない生」の前提が、現実には掘り崩されていく時代を待たなければならないのである。

(3) 〈無限の生〉の「無間地獄」

われわれはこれまで、「意のままになる生」こそがあるべき人間の姿であると考え、〈無限の生〉の「世界観＝人間観」が、歴史的にいかなる形で展開してきたのかということについて見てきた。ここからは、そうした「世界観＝人間観」がなぜ悲劇的な帰結をもたらすのか、〈無限の生〉に内在している根源的な矛盾について見ていきたい。

前述したように、われわれは近代と呼ばれる時代を通じて、着実に「存在論的自由」を実現させてきたと言える。実際、自由、平等、自律、共生といった

近代的な価値理念の数々は、いずれも「本来の人間」＝「完全な人間」の名のもとに「存在論的自由」の拡大を要請していくものであった。これらの価値理念が〈無限の生〉との間に深い連関性を備えていることは、それらが何より「現実に寄り添う理想」としてではなく、「現実を否定する理想」として語られてきたことにも良く現れているだろう。「現実に寄り添う理想」とは、自身を取り巻く現実から出発し、それを引き受けた先にある、より良き生き方のための理想のことである。これに対して「現実を否定する理想」とは、想像された理念から出発し、理念に相応しくない現実そのものを克服しようとする理想のことを指している。前者の理想が現実との格闘、現実との折り合いのなかから導出されるものだとすれば、後者の理想は、現実から離れた「あるべき人間」という地点に立って、本来無条件に与えられるべきものとして想起されるものだからである⁽¹⁸⁾。

確かに「現実を否定する理想」は、その準拠点が現実の外部に置かれることによって、しばしば現実を改変する強力な潜在力を発揮してきた⁽¹⁹⁾。しかしまさしくこうした性質ゆえに、その理想は深刻な矛盾にもまた直面してしまうのである。例えば「存在論的自由」の理念は、われわれに「存在論的抑圧」からの解放を要求するだろう。しかし自らを拘束する「鉄鎖」をひとつ取り除いていく度に、おそらくわれわれは自身を縛るさらなる「鉄鎖」に気がつくのである。そしてそこには終わりが無い。というのも「存在論的自由」の理念は、ここで一切の「鉄鎖」に縛られることのない人間など存在しないという人間的現実を決して受け入れることができないからである。自由も、平等も、自律も、共生も、それらが「現実を否定する理想」として語られている限り、そこには同じ矛盾が内在することになる。例えばわれわれが「不自由」をひとつ取り除けば、われわれはそこに新しい「不自由」を「発見」する。そして「不平等」をひとつ取り除けば、われわれはそこに新しい「不平等」を「発見」するだろう。そうした理想は、「意のままになる生」という、決してたどり着くことのない「完全な人間」の物語に依拠している。そのため絶えず、現実を否定し続けていなければならないのである。それは言うてみれば、〈無限の生〉がもたらす「無間地獄」に他ならない⁽²⁰⁾。

「完全な人間」を追い求める人々は、したがって目の前の不自由、不平等、非自律、非共生にばかり目を奪われてしまう。しかし繰り返すように、われわれが目すべきことは、こうした終わりなき循環構造の傍らで、われわれが望んだ「理想世界」もまた、着実に具現化されてきたということである⁽²¹⁾。例えば“自由”は、「自己責任」を伴うものの、〈生〉にあらゆる「自己実現」の機会が与えられるという形となって実現されてきた。また“平等”は、原則的には、すべての人間が同一条件のもとで〈社会的装置〉に接続できるという形となって実現されてきた。“自律”は、生きることの「自己完結」を通じて、あらゆる対象を自ら考え、価値づけることができるという形となって実現されてきた。そして“共生”は、〈社会的装置〉を媒介としながら、また互いへの「不介入」を徹底することによって、差異を乗り越え、多様な価値観のもとで、人々が緩やかに結合できるものとして実現されてきたのである。その実感が無いというのであれば、【第九章】で見てきたように、100年前の人々がかつていかなる世界のもとで生きていたのかを想起してみると良い。ここで目を向けるべきことは、その理想の実現の不徹底さや不完全性ではなく⁽²²⁾、むしろその理想が、いかにしてこの地上に具現化されてきたのかということの方である。すなわちそれらが「〈ユーザー〉としての自由」、「〈ユーザー〉としての平等」、「〈ユーザー〉としての自律」、「〈ユーザー〉としての共生」といった形で、〈社会的装置〉の力を媒介として、はじめて実現されてきたという事実である。このことは、今日われわれが享受している「自由」も、「平等」も、「自律」も、「共生」も、われわれが〈自己完結社会〉に接近することによってこそ成し遂げられた側面があるということを意味している。そしてわれわれが「まだ足りない」といって、貪欲に「意のままになる生」を追い求める度に、われわれは一步、また一步とさらなる〈自己完結社会〉に向かって前進していくということもまた意味しているのである。

しかし〈無限の生〉の「世界観＝人間観」がもたらす真の矛盾は、さらに次の地点にある。前述のように、それが顕在化を遂げるためには、〈生の自己完結化〉と〈生の脱身体化〉が本格的に進行する時代、爆発的な科学技術の展開に伴って、「意のままにならない生」の諸要素が文字通り取り除かれていく時代を

待たなければならなかったからである。それまで〈無限の生〉は、現実の分厚い壁に立ち阻まれ、その秘められた力を十全に発揮することができなかった。「現実を否定する理想」は、その理念が未だ現実味を欠いているうちは、人々に限られた影響しか及ぼさないからである。しかし、変容したのは現実の方であった。実際われわれは、歴史的にはさほど遠くない過去において、住むべき場所、携わるべき仕事、あるいは関わるべき他者から、結婚、出産、子育てに至るまで、個人的な〈生〉を形作るあらゆる事柄が“自発性”と“自由選択”に基づくものへと移行していく時代を経験してきた。そしてわれわれはいままさに、わが身に降りかかる「意のままにならない他者」や「意のままにならない身体」からの影響を、科学技術を通じてますます「意のままに」管理、コントロールできる時代へと移行しつつあるのである。「現実を否定する理想」は、それが着実に具現化し、現実がその理念に近づいていくほどに、人々に強力な作用を及ぼすようになるだろう。こうしてある種の分水嶺を越えたとき、〈無限の生〉はついにその本領を発揮することになる⁽²³⁾。端的に言おう。ここでは「意のままになる生」こそが「正常」となり、「意のままにならない生」の現実は「非正常」として認識されるようになる⁽²⁴⁾。自発性と自由選択が限りなく飽和していく世界のなかで、われわれを取り巻く「意のままにならないもの」たちは、やがてすべてが「不合理」で、「不当」で、「異常」なものとして認識されるようになるだろう。「かけがえのないこの私」は、こうして「こうでなければならぬこの私」となるのである。

だがまさにこの地点において、〈無限の生〉の真の矛盾が露わとなる。なぜならわれわれが人間である限り、たとえどれほど「意のままにならない他者」や「意のままにならない身体」から解放されて見えたとしても、そこには必ず「意のままにならないもの」が残されているからである。ここでわれわれは、あの「不介入」の試みさえも、なぜ結局は挫折を余儀なくされたのかということを思いださなければならない。要するに、〈無限の生〉は必ず敗北する。ここにあるのは、「意のままになる生」をどこまでも希求した末に訪れる、〈無限の生〉の、現実というものに対する敗北なのである。

この恐るべき事態は何を意味しているのだろうか。ここではそのことを、ふ

たつの「寓話」に託しながら見ていこう。

あるところに、殺生に心を痛めるひとりの若者が住んでいた。彼は人間を、他の命を傷つける悪しき存在であると考え、自身がその「悪」に気づいてしまった以上、「悪」に屈することはできないと考えた。若者が最初に行ったのは、動物たちの命を救うために、自ら一切の肉を食べないということであった。しかし意地悪な人間が若者に向かって言う。「あなたは他の命を傷つけないと誇らしげでいるが、あなたは植物を殺して食べているのではないか」。そこで若者は、今度は自ら野菜を食べることを禁じ、果実のみで生活することを決意した。なぜなら果実は「植物が動物に食べてもらうために自らもたらした恵み」であると若者は考えたからである。ところが今度は、別の人間が彼に向かって言う。「あなたが食べている果実は、本当に植物があなたに食べてもらうために実らせたものなのか。果樹園などというものを造り、あなたは植物を自分自身に奉仕させている。それは虐待とは言わないのか」。それを聞いた若者は言葉に詰まり、「他の命を傷つける」おのれの運命を呪いつつ、ついに痩せ衰えて死んでしまった⁽²⁵⁾。

もうひとつは、ちょっとした「喜劇」の物語である。

先生「ここに熱した鉄の棒があります。あなたはこれを素手で持つことができますか。」

生徒「いいえ、持てません。そんなことをすれば大やけどをしてしまいます。」

先生「いや、人間は無限の可能性を持っているのです。今はとても実現しないと思えることでも、理想を捨てずに諦めなければ、どのようなことであってもいつかは実現するのです！」

生徒「でも、やっぱり熱いです。私にはできそうにありません。」

先生「それでは、身近なところからやってみましょう。それで、少しずつ変えていけばいいのです。」

生徒「なるほど！ では、私もお風呂の温度を42℃に設定することから心がけます！」

まず、このふたつの「寓話」には、いずれも〈無限の生〉の矛盾が表現されている。最初に注目したいのは、両者が紛れもなく「現実を否定する理想」の物語であるということである。例えば前者の「若者」は、他の命の犠牲を伴わない人間の生などありえないという現実を否定している。また後者の「先生」は、いかなる努力によっても人間の手は熱鉄を持つことなどできないという現実を否定しているからである。いや、そうではないと思う読者もいるかもしれない。例えば先の「若者」は、他の命を犠牲にしなければならない人間の現実を知っていたからこそ、その現実を乗り越えようとして格闘したのであり、先の「先生」もまた、熱鉄を受けつけない人間の現実を知っていたからこそ、努力と英知によって、それを克服していく道を説こうとしていた。それは「意のままにならない生」の現実に対する“熟慮”であって、現実の否定とは異なるのではないか、というようにである。

だがまさに、その点が違うのである。彼らは、「意のままにならない生」の現実から出発し、それを引き受けようとしたのではなく、あくまで現実の外側にある“理念”から出発していた。「一切の犠牲を伴わない人間の生」や「一切の灼熱にも耐えうる人間の身体」などといった、現実からかけ離れた理想を起点として、そこから現実に立ち向かおうとしていたのである。彼らは自らの現実に寄り添おうとする気も、その現実に込められた意味を理解しようとする気もさらさらない。そしてだからこそ、彼らは絶えず現実を否定し続けなければならない。「まだだめだ」、「まだ足りない」といって、いつまでも理想とは異なる現実を前に思い悩んでいなければならない。そしてついには、あるべき理想を実現できないからといって、自分自身を責めるようになるだろう。「犠牲を伴わない生」が実現しないのも、「熱鉄に耐えうる身体」が実現しないのも、要はわれわれ人間自身、あるいは「この私」自身に原因があるのだ——「この私」（人類）が未熟であるから、「この私」（人類）が怠惰であるから、「この私」（人類）が愚かであるから、そして「この私」（人類）が根本的な欠陥を持つ存在で

あるからだ——といったようにである。

はたして読者には、この「若者」や「先生」の姿が滑稽に見えるだろうか。だが、これこそがわれわれ自身の姿なのである。思い返してみしてほしい。われわれが「真の自由」、「真の平等」、「真の自律」、「真の共生」と口にするとき、その目線の先には何があったのだろうか。集団に埋没することのない〈自立した個人〉でも、〈間柄〉なき〈関係性〉でも、負担なき〈共同〉でもかまわない。われわれはそこで、知らず知らずのうちに現実否定の理想を掲げ、あたかも先の「若者」や「先生」のごとく自ら“超人”になることを求めてきたのではなかつたらうか。

そしてこれらの「寓話」には、いずれも続きがあるのである。われわれ人間は、その驚くべき潜在力によって、「意のままにならない生」の現実を部分的には「意のままになる」ものへと改変することができるからである。例えば高度バイオ技術を駆使することによって、微生物から完全食品を生みだすことに成功すれば、確かに先の「若者」は、「植物を犠牲にする」という自らの苦悩から解放される。また先の「先生」であれば、自分の右腕を切り落として、代わりに機械の腕をつなげばどうだろう。なるほど、確かに熱鉄を持つことができるではないか。要するに、現実の外部にあったはずの理念が、ある面では実現してしまうのである。こうして彼らは、いつの日か本当に、自らがその約束の地へとたどり着けるような気がしてくる。しかしそのことによって、かえって彼らは苦しめられるのである。夢が叶った「若者」は、今度は微生物を犠牲にすることに耐えられなくなる。機械の右腕を手に入れた「先生」は、今度は左腕が、あるいは脚が、熱鉄を受けつけないことに耐えられなくなるからである。

もう、これ以上繰り返す必要はあるまい。科学技術を搭載した〈社会的装置〉は、確かにわれわれを部分的には「意のままにならない生」から解放してくれる。しかし逃れられると信じ込み、逃れようと足掻くほどに、理想と現実との間の亀裂は致命的に開いていくだろう。そして「意のままにならない生」の現実には、闇夜の月のごとくわれわれの後をついて回り、最後は容赦なくわれわれの前に君臨する⁽²⁶⁾。要するに〈自己完結社会〉に生きるわれわれの苦しみ、その根底にあるのは、〈無限の生〉が提示してきた人間的理想と、われわれが直面

する人間的現実との間に生じたとてつもない乖離、両者の間でわれわれが引き裂かれていることにあるのである。そして〈無限の生〉が敗北するとき、おそらくわれわれは、その迫り来る敗北感と自責の念とに耐えられない。「意のままになる生」こそが「正常」であると信じてきた人々は、そこで「意のままにならない生」とともに生きるということの意味、そしてそのための術というものを、何ひとつ獲得せずに生きてきたからである。

(4) 究極の「ユートピア」——「脳人間」と「自殺の権利」

だが、次のように考えてみてはどうだろうか。もしもわれわれの苦しみが〈無限の生〉の敗北、つまり未だに残存する「意のままにならない生」との軋轢にあるのだとすれば、〈社会的装置〉と科学技術によって、〈有限の生〉の桎梏を完全に制圧してしまえばよいではないか。実際、現代科学技術はいまなお〈生の自己完結化〉と〈生の脱身体化〉を加速させている。それをよりいっそう徹底し、ある種の臨界点を超えればよい。そうすれば理想と現実の乖離は目視できないほどに縮小し、われわれは苦しみから解放されるに違いないからである。

ただし、〈有限の生〉を制圧した未来とは、いかなるものになるのだろうか。例えばここで、「究極の平等」が実現した社会について考えてみよう。まず、ここではすべての人間に遺伝子操作が加えられ、人々は身体的潜在能力の「総和」が等しくなるように生まれてくる。そして成人するまで、AIと高度な専門家からなる「家族」によって大事に保育され、等しく「個性を伸ばす教育」を施される。加えて「初期設定」として付与された潜在能力に不満を持つ人間が出てくることを考慮して、ここでは成人すると同時に、一度だけ遺伝子操作を含む主体的な人体改造の権限が与えられている。もちろんその社会には、「不平等」の元凶となりうる相続などという概念は存在しない。「初期設定」として与えられる財は、〈社会的装置〉によって厳密に管理されており、死亡した人間の所有物は、すべて一様に〈社会的装置〉へと還元されるようになっているからである。こうして、この社会においては、生まれに伴う「不平等」は撲滅される。人々は自身の能力を自己決定することができ、あとは等しく自己責任となる。